

柏木教会月報

4月号

東京都新宿区北新宿3-1-18 ☎03-3368-2156 www.church.ne.jp/kashiwagi/

彼女を記念して

マタイ福音書二六章一～三節

教師 富永憲司

「はつきり言つておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」（二三節）

主イエスが、ある家で食事の席についておられた時のことです。突然、ひとりの女人人が現れ、みんなの驚きの中、主イエスの頭に高価な香油を注ぎ尽しました。砂ぼこりの舞う道をサンダル履きで移動する土地柄ですから、客を迎える礼儀作法の一つに足を洗つたり、体を拭いたりすることがありました。しかし、そのために高価な香油を注ぎ尽くすというのは、あまりにも度が過ぎた行為でした。そこでお弟子たちは、何という無駄な浪費とばかり、この女人を非難したのでした。

しかし、この女人にしてみると、だれに何を言われようとも、自分がすることが少しくらい常識外れと思われようとも、主イエスにだけはできるだけのことをしたかったのです。しかも、主イエスに何かをささげるときは、価値のないものではなく最高のものを、また惜しみつつではなくすべてをささげたかったのです。

主イエスは、この女人の行為を大変お喜びになり、擁護して、彼女はわたしの死の準備、葬りの備えをしてくれたのだとおっしゃいました（一二節）。彼女の行為は、主イエスの十字架の救いへの感謝の応答でした。

私どもを愛し、私どもの本来は赦されざる大きな罪を救すために、神の御子の死をもつて贖うという十字架の救いを思うと、この女人の人も何か分別臭そうにすましている訳にはいかなかつたのです。主の激しくも異様な愛とその救いのみ業に心打たれ、魂を振り動かされて、彼女は死に行く主にできるだけのことをしたのでした。

愛と赦しを与えてくださる方の死に際に際して、人は損得の計算はできないのです。この香油が無駄になるとか、他に有効な使い道があるとか、そういう計算はできないのです。すべて本物の愛は、損得計算を許さないからです。

こうしてみると、彼女を非難したお弟子たちの問題が分かります。キリストの十字架の死、それは私どもの大きな罪を救すためのものでした。従つて、自分たちの罪が神の子の命でしか贖えないほどいかに大きいものかがわからないと、自分たちのために死に赴くキリストに対するまことの愛も、感謝も出てこないのでした。それが本当に分かつていれば、このお方に自分のすべてをささげても惜しくないと思うでしょう。この女人のしたことに共感こそされ、非難などできなかつたでしよう。

十字架のキリストを思い起こしましょ。このお方の真実な愛と赦しのまえに、心打たれ、魂を振り動かされて、感謝の応答をささげて歩んでまいりましょう。

主イエスは、「世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」とおっしゃいました。ここに、十字架の主イエスに感謝をもつて応答する信仰が鮮やかに実現されているからです。私ども赦された罪人が、主にあつて新しい命に生き始める永遠の道がここにあります。